

# 宮沢賢治を核にした「年間を貫く言語活動」の充実

## ～「賢治見つけ」をしよう～

小杉 栄樹

本研究では、物語教材における「年間を貫く言語活動」を充実させる方法として、「宮沢賢治」を核にした取り組みについて検証していきたい。国語科学習において、「生涯にわたる学習の基礎となる力」「答えのない問題に向き合う力」（第2期教育振興基本計画・平成25年6月閣議決定）を育成するために、「問いと学びの連続性」を意識した学習を心がけていきたい。「問いと学びの連続性」とは、子どもたちの興味関心疑問から学びがスタートし、話し合いの過程を通し、自分なりの答えをもつとともに、友達の考えや教材の魅力を通して、新たな興味関心疑問をもち、それが次の学習へとスパイラルにつながっていく学習課程である。その中で、子どもたち自らが課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に考察する力を育成していきたい。クラスみんなが安心して学べる学級風土の中、「『賢治見つけ』をしよう」という「年間を貫く言語活動」のもと、「ウェーブリーディング」と「多読」を取り入れながら、豊かな読書や実体験に基づいた深い思考力と表現力が要求される学びを実現していきたい。

キーワード：宮沢賢治、年間を貫く言語活動、第2期教育振興基本計画、問いと学びの連続性  
賢治見つけ、ウェーブリーディング、多読

### 1. 「年間を貫く言語活動」の充実

「宮沢賢治」を核にした「年間を貫く言語活動」を充実させることにより、受け身の学びではなく、子どもたち自身が、「学ぶことの意義」を理解し、学びを進めていける子を育てていきたい。本校国語科部では、本年度の研究テーマを『つながり』を意識して、読む力を育むとした。三つの対話、つまり、対象、他者、自己との豊かな対話により、子どもたちの「思考力」「判断力」「表現力」を育んでいきたいと考える。そのために、特に「付けたい力の明確化」「単元を貫く言語活動」「教材との出会いの工夫」の三点を重視している。本実践では、『賢治見つけ』や『並行読書』を通して、『宮沢賢治作品の世界をより深く読み味わう』ことにチャレンジする」という目的をもつことから学びをスタートし、「注文の多い料理店」「イーハトーヴの夢」「やまなし」「グスコーブドリの伝記」「雨ニモマケズ」「あすこの田はねえ」「永訣の朝」を教材として学習を進めていく。それと並行して、他の宮沢賢治作品や別の作者による宮沢賢治の伝記を多読することを通して、単元のねらいに迫っていききたい。

### 2. 「宮沢賢治」との出会いを通して

#### 2. 1. 付けたい力の明確化

国語の能力は螺旋的・反復的に繰り返しの学習の中でこそ身につくものである。それ故、ある単元において、どのような言語活動を位置づけるかの前に、教師

から見て、子どもたちの実態を把握し、教材の特徴（魅力）を理解する必要がある。その上で、指導のねらいを十分に確認し、単元を通して子どもたちにつけたい力を明確化する必要がある。本実践では、子どもたちに「付けたい力」として、以下の五点を設定した。

○読んで感じ取った自分の思いが伝わるように朗読している。【C読（1）ア】  
○登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた描写について自分の考えをまとめることができる。【C読（1）エ】  
○目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むことができる。【C読（1）カ】  
○話し合いで深めた考えをもとに、構成を工夫して、自分の意見を明確に伝える文章を書くことができる。【B書（1）ア・イ】

#### 2. 2. 単元を貫く言語活動

単元を通して子どもたちに「付けたい力」を明確にした上で、効果的な言語活動を選ぶ必要がある。

言語活動を充実したものにしていくためには、単元を貫いて言語活動を位置づける必要がある。言語活動を単元の一部にしか位置づけず、前後で関連のない別の言語活動を行うのでは効果は上がらない。充実した言語活動とは、子どもたちにとって学習の見通しをもてる活動であり、子どもたちにとって具体的な目的や必要に応じての活動でなければならない。さらに、指導上の重点的なねらいを実現していくために学習活動

を精選していくことも重要である。

本実践では、子どもたちの学びを充実させていく言語活動として、「賢治見つけ」と「多読」を取り入れた。第一次で、単元の流れをつかむ。第二次で、「ウェーブリーディング」方式で話し合いを進め作品の主題に迫る。第三次では、「宮沢賢治記念館を開館する」ことを目的に、宮沢賢治作品の中からお気に入りの一冊を選び「リーフレット作り」「ブックトーク」「読み語り（6B子どもLaLaLu隊）」「ジオラマ作り」「卒業論文～ぼくのわたしの宮沢賢治～」を行う。これらの言語活動を通して、作品の主題や宮沢賢治の生き方や考え方に迫らせたい。また、生き生きとした書き表し方、音、光、色に関するもの、心情把握のための伏線となる効果的な表現など、優れた情景描写にも注目させたい。作品を通して、宮沢賢治の人に対する優しさ、寛容さ、平和を願う気持ち、時に見せる厳しき等への共感が、子どもたちを「宮沢賢治の世界」により引きつけるものであると考える。



図1 見通しをもたせることのできる教室掲示

## 2. 3. 教材との出会いの工夫

子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫していく。例えば、同一シリーズや同一作者の作品が読みやすい環境を教室に整えることで、子どもと教材との距離が縮まり、そこで教材と出合わせることで、子どもたちの学習への関心意欲は高くなるであろう。子どもたちが、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入の工夫が必要である。

本実践では、単元に入る前に、子どもたちと教材とのやさしい出会いのために、教室に和歌山市民図書館からお借りしたおよそ50冊の宮沢賢治作品を並べた「宮沢賢治読書コーナー」を設けた。また、読み聞かせボランティアのお母さん方に協力していただき、宮沢賢治作品の読み聞かせをしていただいた。このような出会いを通して、子どもたちは、朝の読書タイムなどを利用し、主教材の学習と並行して、たくさんの宮沢賢治作品に親しむことができた。

## 3. 授業の実践① ～年間を見通した学習計画～

今回の「『賢治見つけ』をしよう」では、単元計画を以下の4期（28時間）に分けている。

- |   |
|---|
| 第1期…「イーハトーヴの夢」「注文の多い料理店」<br>(8時間)                     |
| 第2期…「雨ニモマケズ」「永訣の朝」<br>「あすこの田はねえ」(4時間)                 |
| 第3期…「やまなし」「イーハトーヴロマン」<br>(10時間)                       |
| 第4期…「グスコーブドリの伝記」「ぼくのわしの<br>宮沢賢治 ～宮沢賢治論を書こう～」<br>(6時間) |

### 3. 1. 第1期「イーハトーヴの夢」「注文の多い料理店」

第1期では、伝記「イーハトーヴの夢」や宮沢賢治の代表作である「注文の多い料理店」作品を学習することにより「賢治らしい生き方や考え方」を考えさせたい。

「イーハトーヴの夢」では、作者の信念、目的をもって生き抜くという強い意志と行動、そして、そこから生み出された作品が長く人々の共感を呼んでいることを知ることができる。宮沢賢治独特の世界を理解するには、「イーハトーヴの夢」が参考になる。作者の伝記的事実を知ること、その生き方にふれ、作者の感じ方や考え方、作品世界の現風景を想像していくことができる。それ故に、本単元では、「イーハトーヴの夢」を中心に教材にして、伝記を学習することから学習をスタートしたい。

「注文の多い料理店」は、山深いところにある「注文の多い料理店」を舞台に、2人の若い紳士と山猫の思惑の行き違いがユーモラスに描かれている作品である。2人の紳士はごちそうを期待し、山猫は2人の紳士をごちそうにしよう注文を繰り返す。最後に紳士は身勝手な言動から消えることのない印を顔につけられてしまう。生き物の命を何とも思わず、金銭的価値観で物事を判断し、便利さのみを追求する都会生活者への反感とそのような文明社会への痛烈な批判がファンタジー仕立てに語られている作品である。作者の痛烈な思いが隠されているが、子どもたちは戸に書かれた注文と紳士の言動を中心に描かれている単純明快な展開と、戸の奥へ奥へと進んでいく期待感を味わいながら読み進めていくであろう。またこの作品は、2人の紳士や山猫の会話、次々に出てくる戸の言葉、多彩な色彩、場面の展開を表す描写等、様々な表現上の工夫がなされていることにも特徴がある。本単元では、それらのおもしろさや表現上の工夫にも気づかせるこ

とにより、子どもたちの感じたこと、考えたことを大切にしながら、作者の思いへと迫っていきたい。

第1次では、畑山博さんの「イーハトーヴの夢」を中心教材にして、堀尾青史さんと西本鶏介さんの「宮沢賢治」、宮沢賢治の実弟の宮沢清六さんの「兄、賢治の一生」を並行読書しながら、「年譜」「生い立ち」「業績」「エピソード」という4つの視点で、宮沢賢治の生き方や考え、時代背景、作品などについて迫っていく。第2次では、「注文の多い料理店」の学習を、「山猫が本当に2人の紳士を食べようと思っていたのか」を考えさせることで作者の思いに迫っていきたい。第3次では、「ビブリオバトル」的な要素を取り入れた『賢治見つけ』ブックトークを通して、宮沢賢治の他の作品について、読書活動を広げていきたい。また、単元を通して、「賢治リーフレット」を作成することで、宮沢賢治についての理解をより深めていきたい。

### 3. 2. 第2期「雨ニモマケズ」「あすこの田はねえ」「永訣の朝」

第2期では、宮沢賢治の「詩の世界」に浸らせたい。「雨ニモマケズ」「あすこの田はねえ」「永訣の朝」の三作品を学習する。

「雨ニモマケズ」は、病床で手帳に鉛筆で書かれた詩で、賢治の代表作である。「無私」の心で、生涯をかけて努力し実行して途中で倒れた賢治のせつない願いが訴えられていて感動を呼ぶ作品である。

「あすこの田はねえ」は、賢治が農業の指導をしていた教え子に宛てた詩であり、悪天候の中不眠不休でやつれた教え子たちへの具体的な助言の後、「これからのほんとうの勉強は、…」と結ぶ終盤が、6年生の子どもたちにとって大変意義深く作品である。

「永訣の朝」は、小さいときから仲のよかった兄妹で、賢治の一番の理解者であった妹トシとの別れを書きあらわした詩である。括弧の中には、妹の言った言葉がそのまま書き留められていて、肉声を聞くような強い効果があらわれている。

賢治は、自分の詩を「心象スケッチ」とよんでいる。

「心象」とは、心に浮かんだイメージのことで、賢治は、心に浮かんだことを素早く手帳に書き留めていき、繰り返し手直ししながら、作品としていった。わかりにくい表現もあるが、「永訣の朝」の括弧内の言葉のように、読み深めていく内に、ストレートに胸を打つ表現も多い。一年間をかけて「宮沢賢治」を学ぶ6Bの子どもたちなりに、賢治の「詩の世界」に浸らせたい。

第2期の学習では、子どもたちは、「6B子どもLaLaLu隊」として、ペア学年である1年生に「読み語り」を行うというめあてをもって学習を進めていく。第1期で学んだ作品に込められた賢治の思いを詩

の中にも見つけ、より深い理解の上に立ち「読み語り」を工夫する姿勢を育みたい。

### 3. 3. 第3期「やまなし」

第3期では、「やまなし」の学習を行う。「やまなし」は、五月と十二月の二話になっている。五月、生き物たちは、まばゆい陽光の中で生命を謳歌し始める。しかし、その生命は他の生命を奪うことによって維持されていくという冷酷な事実を含んでいる。『弱肉強食』は、自然界の厳しい掟であり、避けて通ることのできない事実である。そしてその事実は、いつ自分たちに襲いかかってくるか分からないという恐怖と悲しみをかきの兄弟に教える。十二月、万物が枯渇し、死に絶えるかと思われる冷たく寂しい冬。しかしその中で、生き物たちは、次の生命をはぐくみながら躍動のときを準備する。奪うことも奪われることもない穏やかさ、温かさ、平和もある。そこに落ちてきた「やまなし」は、熟して落ち、自らの存在を、他の生命のための豊かさ、喜び、希望としている。不安、恐怖、争いを乗り越えた、明るく喜びに満ちた幸福な世界のすばらしさを「やまなし」の主題として押さえたい。

宮沢賢治は、「やまなし」を妹トシの魂に贈ったといわれている。トシが亡くなって、最初に書かれた作品が「やまなし」である。天命を全うした死が、他の生命の中に生き続けるという、理想的な死、幸福な死を願う賢治の思いがあると考えられる。小学6年生の子どもたちがどこまで賢治の思いに迫ることができるか分からないが、「美しくも厳しい自然の中で、全ての生命が、“まことの幸せ”を求めて、精一杯命を輝かせている」ということを感じ取ってほしい。

この作品は、宮沢賢治の独特な表現（擬態語等）や比喩表現などが駆使された、象徴的で、深い思想性を持つ作品である。6年生にとっては、それらを読みこなすことは、難しいと思われるが、作品のもつ柔軟な発想や豊かな想像力を養う表現が、子どもたちの意欲をかきたてる魅力をもった作品になっており、それ故、優れた表現を読み味わい、物語のイメージを豊かに広げながら読み深め、主題にせまることのできる作品である。

第3期の学習では、『6B宮沢賢治記念館』を6B教室に開館する。今までの学習で積み重ねてきた子どもたち一人一人の宮沢賢治本人や作品への思いをポスターや新聞、紙芝居、ポップなどにまとめて、記念館に展示し、お互いに紹介し合いたい。さらには、学校図書室や公立図書館にも協力していただき、学校全体や地域にも発信していきたい。それらの活動を通して、読書活動を広げ、宮沢賢治についての理解をより深めたい。

### 3. 4. 第4期「グスコブドリの伝記」「ぼく

#### のわたしの宮沢賢治～宮沢賢治論を書こう～

第4期の学習では、「年間を貫く言語活動」のまとめとして、また、卒業を前にした子どもたちにとって小学校生活の学習の一区切りとして、「グスコブドリの伝記」と「ぼくのわたしの宮沢賢治 ～宮沢賢治論を書こう～」を学習する。

「グスコブドリの伝記」は、飢饉や日照りから人々を守るために生きてきた主人公「ブドリ」を通して、「人間全体の幸福を求める生き方」や「自己犠牲の生き方」について問うた作品である。人々の幸せを願って力を尽くす生き方、自分だけではなく仲間の幸せを願い仲間のために働く生き方が、賢治の生き方と重なる。「賢治はどのような生き方が大切だと言っているのか」を考えることにより、物語の主題に迫らせたい。第3次では、今まで学習してきた成果を「卒業論文」として、「宮沢賢治論」を書く。書き上げた作品は「卒業文集」として冊子にまとめ学習の総まとめとしたい。

#### 4. 授業の実際② ～効果的な読解指導の工夫～

10時間程度の単元構成で、「多読」を取り入れた言語活動を行う場合、たくさんの物語にふれることができるメリットがある反面、読み取りが浅くなるデメリットがある。限られた時間の中で効果的な読解指導を行う工夫として、以下の三点を実践した。

- (1)「ウェーブリーディング」で読み深める
- (2) 学びの筋道を振り返ることのできる環境作り
- (3)「6B宮沢賢治記念館」を通しての交流

##### (1)「ウェーブリーディング」で読み深める

限られた時間の中で効果的な読解指導を行う工夫として、「ウェーブリーディング」を活用した。「ウェーブリーディング」とは、「主人公の人柄」「登場人物の心情の変化」「物語のクライマックス」等、物語を読む視点を変えて、全文通読を繰り返す単元構成を意味する。子どもたちは何度も通読する中で物語の主題に迫っていく。「ウェーブリーディング」で学んだことを教室に掲示すること（学びの足跡の掲示）や「ワークシート」「付箋」を使用することにより、「ウェーブリーディング」の効果がより高まると考える。第三期の「やまなし」の実践では、「クラムボンって何だろう」「五月の情景」「十二月の情景」「なぜ『やまなし』という題にしたのか」の四つのテーマについて話し合った。

以下に、子どもたちの読みの深まりの様子を授業記録で示したい。

（一時間の学習を通して、子どもたちは「なぜ宮沢賢治は『やまなし』という題名にしたのか」という課題に一生懸命向き合い考え話し合った。以下の授業記録は、授業の最後の場面である。この一時間の学習だけでなく、単元を通して学んだこと（イーハトーブロマンの並行読書）や「妹トシ」のこと等、第一期や第二期で学んだこともいかしながら、話し合いを通して、子どもたちは深い読み取りができています。）

たくみ：五月は未熟。十二月は熟している。カニも同じだと思う。

T：五月は未熟者だった。十二月は一人前になっている。

たくみ：人間にも一人前や未熟者もあるから、カニとやまなしも同じやなど。

みう：「カニの兄弟」とか「カニの親子」じゃイマイチ。「やまなし」の方が雰囲気出る。

しゅうた：最初の五月でクラムボンが死んで悲しい。カニ兄弟の弟が泣きそうになった。そこにやまなしが落ちてきたというところからやまなしは幸せの象徴。やまなしでオチをつけようとした。

しずる（つぶやき）：そんなにすると題名を「トシ」にしたらええやん。

T：いっぱい言ってくれたことから、ワークシートに賢治の考えを書こう。

だんと：おれはほんとにやまなしってわからんから予測やけど、やまなしは世界を平和にするとはいったかった。

なぎき：たぶんやけど、落ち込んで生きるのではなく、明るく生きようということかも

しゅうた：賢治とトシに照らし合わせてかんがえたんやけど悲しいこと、うれしいことは生きている間にあるから、死んでしまっても忘れないでほしいという考えがある。

T：はい、今日はこの言葉で終わり。

☆たくみの「五月は未熟者、十二月は一人前」という発言から、みうの「『カニの兄弟』や『カニの親子』という題ではイマイチ」という意見を経て、しゅうたの「妹トシ」との関係も踏まえて「やまなしは幸せの象徴」という発言で、宮沢賢治がこの作品を「やまなし」という題にしたのか迫っていった場面である。

##### (2) 学びの筋道を振り返ることのできる環境作り

り

ワークシートや付箋、ファイルを利用し、自分の考



えを書き残す等、子どもたちの「学びの足跡」を残していった。

### ① 「ワークシート」の利用

課題に対して自分の考えをまとめられる内容にした。道徳的な学習にならないよう、常に「本文に戻る」ことを意識させるため、ワークシートの上半分には本文を書き、下半分に自分の考えを書くようにした。付箋の取り組みと同様に主に家庭学習で取り組んだ。子どもたちにとって、自分の考えを整理するのに大変役立った。また、教師にとっては、子どもたちの考えを事前に把握するのに役立った。



図2 ワークシートの利用

### ② 「付箋」の利用

本文の中で、「課題に対する答え」が書いてあると思うところに線を引き、付箋をはるようにした。その理由を付箋に書くようにした。「ウェーブリーディング」で話し合うテーマについて、子どもたちなりに、自分の思いを書くことができおり、ワークシートに自分の考えを書くときや発表する際に役立っていた。

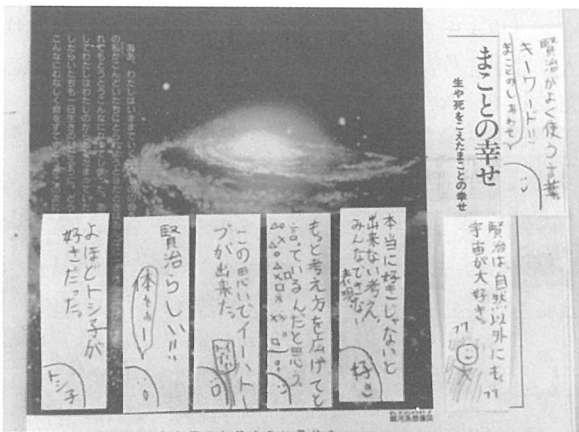


図3 付箋の利用

### ③ 教室を「宮沢賢治」ワールドに

「ウェーブリーディング」で学習したテーマについて子どもたちが話し合った内容を掲示した。第1期から第4期までの学習内容ははっていくことにより、子どもたちは、クラスでの学びを振り返り、考えを関連させながら、より深く学習を進めていくことができた。

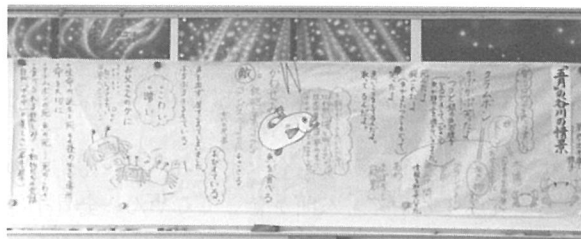


図4 学びの足跡の掲示（五月のイメージカード）

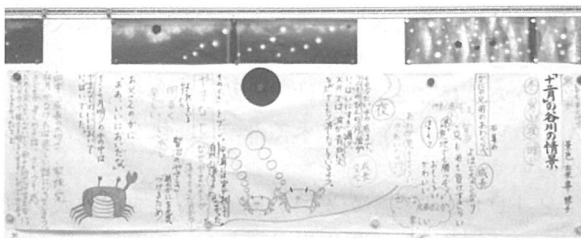


図5 学びの足跡の掲示（十二月のイメージカード）



図6 学びの足跡の掲示（教室掲示）

（第1期「注文の多い料理店」で、二匹の白い犬が飼い主である二人の若い紳士を助けに来た場面の話し合いの場面である。「ウェーブリーディング」を重ねるたびに、「学びの足跡」の教室掲示を参考にした発言が増え、子どもたちの話し合いが物語の主題に迫っていく。）

たかかず：50段落の「ワンワンうあっ・・・」って、助けてくれたやん。二人の紳士を動物も助けてくれるから、動物も大切にしようってこと。それわかるのは、「イーハトーヴの夢」の22段落で「三つの・・・」人間・動物・植物どれも同じだって言っている。

あやか：この話全体を見て、人間がねこに食べられそうになる話やん。普通やったら変な話やん。けど、賢治は人も植物も動物も同じって言ってるやん。だから鳥も同じで、人間が食べるのはおかしい。

こうだい：それは違う。

T：ちがうか。

ねね：ねこが人間やとして、人間が動物を食べるのと同じで、ねこが人間を食べるのも同じやろ。なんて言うか「差別」っていうか。感謝をしようって言うか。

だんと：「いただきます」とか

T：感謝？だれに？

ねね：だんちゃんが言ってるように、「いただきます」とかちゃんとして、みたいな。

しずる：人間が他の動物を食べまくってるやん。ものすごく食べてるやん。人間が食ってるやん。全員平等って言うか。けどね、紳士がひどいんよ。犬が泡をふいたときね。「2400円の損害」って言ってたんよ。犬のことをお金に換えてるんよ。だからねこは犬の仕返しをしようとしている。

しょうた：けどさ、犬は紳士を助けてるやん。仇うたんでもいいやん。助けに来てるのに、仇を討ったらおかしいやん。

T 2400円が高いか安いかわけではなく、自分の犬が泡をふいて倒れたら、何万円の損したって気持ちになりますか？

C ならない。

あやか：犬が高いとかじゃなくて、「命」をお金に換えているのがおかしい。

だんと：もし同じ命って言うんやったら、なんで最後に助けにくるんよ。そこがなぜなんよなあ。みんなの言っていることやったら、最後に食われたらおしまいやん。

T：わかるよ。助けやんでもいいやんなあ。

こうだい：殺したらグロテスクやん。

T：こうだいくんのいうこともわかるなあ。まとめると、お金にたとえられた犬は何くそって思ってるの。でもなぜ最後に助けに行ってるの。

みゆ：賢治の伝記の「イーハトーヴの夢」にも出てるんやけど、「一本の木にも・・・」人間じゃなくても、感情が存在するっていうか。

しずる：人間は今まで高いところなんよ。(図で書き示す)けど、動物はこんなところなんよ。(図で書き示す)けど、殺したら、生きてるのと死んでるのとで差が出るやん。だから、しわしわになったって書いてるやん。

T：命までは取らないって言うことかな。

ひろあき：今までのたくさんの悪いことのお仕置きで、紙くずみたいな顔になってしまった。

こうだい：動物を大切にしなければいけないって、伝えさせようと思って生かしたんよ。

C そうよそうよ。

T あー、生かして二人がね。

だんと：はっきり言って、わかってないんちゃうん。

山鳥を買って帰ったんよ。

こうだい：それは商品やん。

しゅうた：だから、動物を食うなっていうことじゃな

いんよ。何も思わずに食べるな、しずるが言ってたみたいに。

しずる：感謝なんよ。

☆山猫が二人の若い紳士をなぜ食べようとしたのか、お金の損害に例えられた犬がなぜ飼い主を助けたのか、命は助かったが若い紳士の顔はなぜしわくちゃのままだったのか等、作品の主題に向かう課題について宮沢賢治の生き方や考え方に照らし合わせながら子どもたちは話し合いを進めていくことができた。

### (3)「宮沢賢治記念館」を通しての交流

一年をかけて、学びの足跡を残しながら、教室に「宮沢賢治記念館」を開館した。教材の主題や子どもたちの実態に合った言語活動を計画的に取り入れ実践してきた。「黄金の一週間」といわれる学級開きの大切な時期に大まかな計画を伝え、教室の一角に掲示することが、子どもたちに見通しをもたせる上で大変重要である。以下に本実践で行った「宮沢賢治記念館」のセクションを取り上げたい。

☆「イーハトーヴの夢」等の宮沢賢治の伝記の学習を通して、「リーフレット」作りを行う。(第一期)

☆宮沢賢治作品の中で好きな作品を選び、クラスで「ビブリオバトル」を行う。(第一期)

☆「6B子どもLaLaLu隊」として、ペア学年である一年生に「読み語り」を行う。(第二期)

☆好きな作品のジオラマ作りを行い、学校図書室や公立図書館に展示させてもらい、宮沢賢治作品のブックトークを通して他学年と交流する。(第三期)

☆集会発表で、音読劇「注文の多い料理店」を発表する。(第四期)

☆卒業文集「ぼくのわたしの宮沢賢治」を作成する。(第四期)

それぞれの実践が「宮沢賢治記念館」のセクションになる。セクションが増えるほど記念館は充実していく。「ウェーブリーディング」や「並行読書」を取り入れながら作品を読み深めることにより充実した記念館にしていきたい。



図7 教室を「宮沢賢治記念館」に

## 5. 成果と課題

本実践を通して、以下の三つ観点から成果と課題を振り返ってみる。

### (1)「ウェーブリーディング」について

### (2)「賢治見つけ」について

### (3)「並行読書」について

### (1)「ウェーブリーディング」について

子どもたちにとって、物語を一度読めばある程度のストーリーは理解できる。それ故、いわゆる「まるごと読む」という形で、「賢治見つけ」という共通課題を決め、「ウェーブリーディング」方式で学習を進めていくことは有意義であった。全文通読を重ねる中で、宮沢賢治の生き方や考え方に迫りながら、第3次（本実践では、「宮沢賢治記念館を開館しよう」）に意欲を持続して向かうことができた。

課題として、「ウェーブリーディング」で話し合うテーマについて、教師主導で設定してしまった点があげられる。子どもたちと教材との出会いの中で出された子どもの思いに沿ったテーマにしていくことが大切になってくるものと考ええる。

本実践でも取り組んだが、ワークシートや付箋、ファイルを利用し、自分の考えを書き残すなど、子どもたちの「学びの足跡」を残したり、「宮沢賢治読書コーナー」を設けるなど教室環境を工夫し、整えることにより、「ウェーブリーディング」での話し合いがより充実していくものと考ええる。

### (2)「賢治見つけ」について

『賢治見つけ』をしよう」という「年間を貫く言語活動」のもと、四期に分けて実践を行った。一年をかけて同じ作者にこだわって学習を進めていくことに大きな意義を感じた。リーフレットやジオラマ作り、ビブリオバトルやブックトーク、6B子どもLaLaLu隊での読み語り、集会での音読劇等、様々な言語活動を通して、子どもたちは、「宮沢賢治の生き方や考え方」に迫ることができた。子どもたちの意欲を持続させるためには、教師がクラスの子どもの実態や学校の特色に合わせて計画的に行うことが大切である。また、総合的な学習や図工科等、他教科との連携を行うことで時数の確保も可能になる。さらに、保護者の協力も重要である。特に6B子どもLaLaLu隊の取り組みでは、日頃「LaLaLu」のお母さん方にいただいている「読み語り」を、低学年の子たち

にしてあげるといった目的が子どもたちの意欲をより高めていた。グループや個人で「読み語り」の上手さには差も出たが、楽しく聴いてもらいたいという目的のために、友だちの「読み語り」を聴いたり、アドバイスし合ったりする姿が見られた。そこに、子どもたち同士の学び合う姿があった。また、グループで「読み語り」を聴き合うことを通して、紹介された作品を読みたいという思いをもつこともできた。子どもたちにとって、「読み語り」は大変魅力的な言語活動であると感じた。

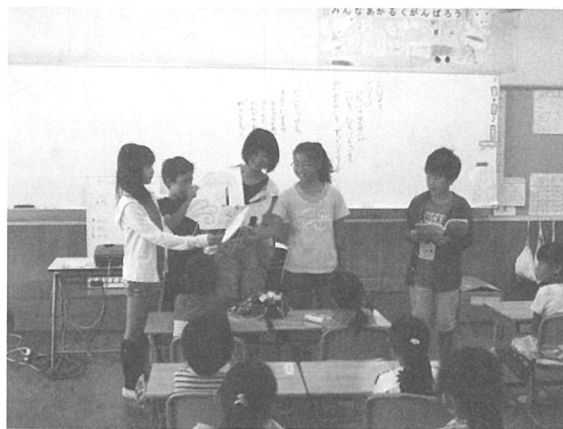


図8 6B子どもLaLaLu隊

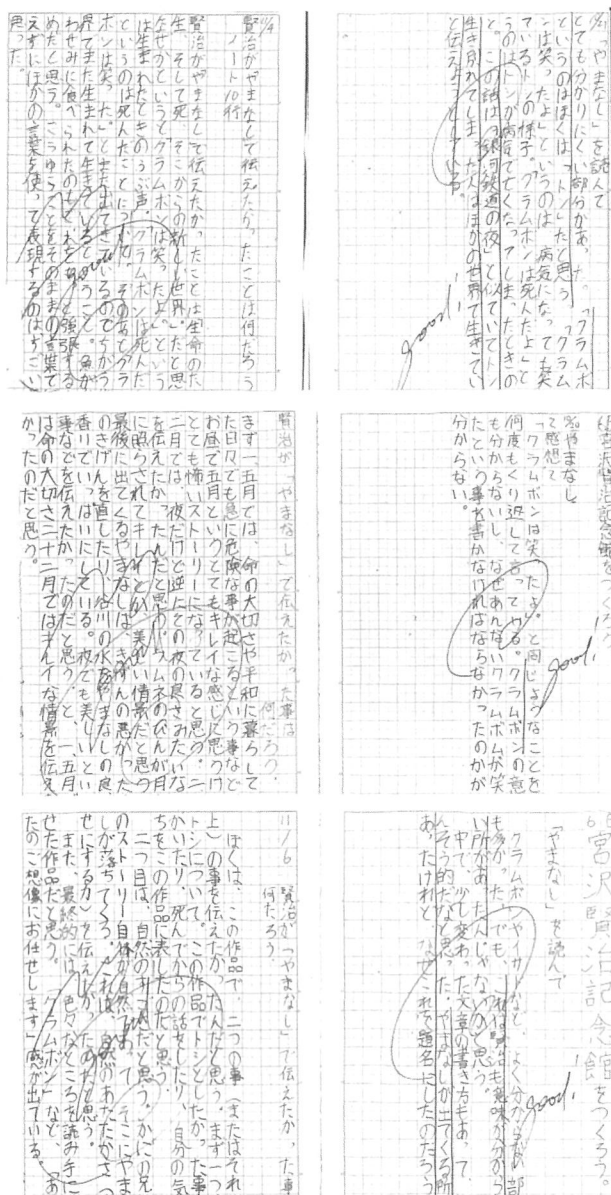
### (3)「並行読書」について

本実践では、子どもたちは、教科書教材の「やまなし」「イーハトーヴの夢」の他に、「注文の多い料理店」「グスコーブドリの伝記」「イーハトーブロマン」「宮沢賢治伝記」を副教材として学習した。さらに、「読み語り」や「ブックトーク」等を通して、たくさんの宮沢賢治作品や宮沢賢治の伝記に出会うことができた。

「並行読書」する場合は、副教材をどこに持ってくるのかが一つの焦点になる。まず主教材（やまなし）を学習し、副教材（注文の多い料理店など）を順次学習する方法もあるだろうし、最初に「副教材」を学習して、その後、主教材を学習する方法もある。それぞれに効果はあるだろうが、大切なことは、「副教材」で学んだことが、「主教材」の学習の中に出され、より効果的な学習ができることである。子どもたちは、一つの教材を学習していると、その教材に集中してしまう。本実践では、「子どもたちにとって、今学習している教材が『主教材』になる」という考えで学習を進めていった。それ故に、「並行読書」を効果的に進めるためには、深い教材理解の上に立った、教師の投げかけが大切になってくると思われる。すてきな作品との出会いが、子どもたちの「次への読書」につながっていくものと考ええる。

第四期の「やまなし」の学習で、10月20日に書いた「初発の感想」と11月4日に書いた「宮沢賢治が『や

まなし』で伝えたかったこと」を掲載したい。子どもたちの学びの成果が現れている



## 6. 終わりに ～国語科でめざす子ども像～

自然、人間、社会との関係において、「正しいものの見方」や「豊かな思考力」を学ばせながら、国語科学習を通して人格形成をしていきたい。

### ①「主体的に読む力」を高めていける子

「主体的に読む」とは、言われなくても、「大事な」と思う言葉や文章に注目し、そこに立ち止まって「問い」をもつことである。受け身の学びではなく、子どもたち自身が、「学ぶことの意義」を理解し、学びを進めていける子を育てていきたい。主体的に学びに取り組むことにより、学習意欲が継続し、著者の思いに触れることができる。そのことにより、自分の言葉が洗練され、創造力が高まり、コミュニケーション力が高まっていくものとする。

### ②「かかわり合い」を大切にできる子

教室が、子どもたち同士の学び合いの場になっているか。子ども同士のつながりがある授業であったか。本来「学び」とは、子どもたちが他者との議論や対話の中で育まれていくべきものである。その「学び」が、「個人化」「競争化」している昨近、子どもたちにとって、「学び」の中に、「かかわり合い」があることは大変重要なことであるとする。子どもたち一人一人が、友だちと、先生と、そして教材と「かかわり合い」ながら、学びを進めていける子を育てていきたい。

### ③「学びの振り返り」ができる子

「振り返り」こそが「学び」であるとする。「思考」とは、「熟成」によって生まれるものであり、簡単に自分の考えは生まれない。子どもたちが自分の学んだことを振り返ることのできる「学びの足跡」を残していくことが大切であるとする。教師にとっても、「学びの振り返り」は大切である。学習課題が子どもたちにとって「心弾むもの」になっていたのか。「追求の質」を高める「問い」であったか。子どもの発言に対して、教師が出過ぎていないか。以上のようなことを検証していく必要がある。子どもたち一人一人がどんな言葉を残しているのかを評価し、そこから子どもたち一人一人に合った指導のあり方を考えていきたい。



図9 主体的に取り組むことのできる子に

## 参考文献

文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説国語編」 東洋館出版社  
水戸部修治 著 『小学校国語科授業&評価パーフェクトガイド』 明治図書 2013年